

三河大樹寺寺院形態の具体像

——大永八年～天文七年——

江 島 孝 導

序

私は修士論文として、三河の大樹寺の文書群を研究することによって中世室町期の浄土宗寺院の存在形態を把握する試みを成そうとし、逐一の文書を対象にして幅広くその意味づけを行ない、それを発表した。採訪文書総数は二一二点であるが、論文自体に取り上げたのは一五〇点余りである。私の行なった試みは史料整理にあたったの基礎作業であり、論文総体を以て、始めて大樹寺とそれを取り巻く時代背景が読み取れるのである。従って、限られた紙数では大樹寺像のイメージアップにも事欠く始末であるが、今はその一部を示す事によって整理作業の一端を紹介してみたいと思う。

論文では大樹寺開山より天正十八年までの間を五つに分けて検討している。すなわち、第Ⅰ期（開山より永正十三年まで）開山勢嘗愚底の時代・第Ⅱ期（永正十四年より天文十三年まで）第二世昇嘗魯鈍から宝嘗愚珍までの時代・第Ⅲ期（天文十三年より弘治二年まで）第九世鎮嘗祖洞から法嘗悦叟までの時代・第Ⅳ期（弘治三年より永禄十一年まで）第十二世進嘗愚耕の時代・第Ⅴ期（永禄十二年より天正十八年まで）第十三世登嘗天室から麿嘗魯聞

までの時代と便宜上分けてみた。尚、第Ⅱ期は大永八年に第六世玉誉愚道の名の有る文書が出てくる事によって、それ以前の世代不明期間とを区別して二項に分けた。

私は今この第Ⅱ期第二項の内、天文七年までの文書を取り出して論述して見たいと思う。第六世玉誉愚道の時代である。玉誉は歴史的には殆んど無名である。すなわち、『縁山志』巻一（浄土宗全書第十九卷二七五頁）にその名が見えるにすぎないからである。ところがこの時期（大永八年～天文七年）十一年間に存する三十二通の文書中四ヶ所にその名が確認され、又この時期に寺院経済機関が整備されている事が分かるので、この時期を取り出してみた。一応別表に文書目録として在地関係文書についてかなり詳細な内容で書き表わしておいたので三十二通全ての文書を紙面に出す事は避ける。尚その作製にあたっては『史学雑誌』第七十八編六号（五九頁）にある、立政寺文書整理表を参照にした。内一通は天文二年十一月に出された松平七代清康による制札の写しであるが、直接在地との関係はないので除いておいた。よって本論は三十一通の文書についての考察である。

本 論

この十一年間に松平六代信忠が享祿四年、七代清康が天文四年にそれぞれ没している。八代広忠は生後まもない頃であり、五代道関は隠退しているとは言え、松平氏としては権力を持っていた様である。今は考察の中で、この時期を詳しく見つめてみようと思う。

大永八年二月の道関安堵状から始まる。

平藪空閑院料田之事

開山勢誉上人御寄進之上者、於彼寺領者、代々住持并旦那等永代令沽却事堅停止、万一此旨有違輩者、従本寺而

可被加御成敗之旨、如件、

大永八年_{子戌}二月三日

充蓮社（花押）

道閑（花押）

從此角田四百文之年貢、真如寺_五成申候、永代不可有無沙汰候、仍而為後日支證如件、

明瞭光譽（花押）

充蓮社は天文七年三月文書に見られる玉譽の花押と同じであり、この文書により六世玉譽の存在を確認できる。内容は、この料田は勢譽の寄進による寺領なので、代々住持并旦那等も沽却してはいけないというのである。光譽の添書によると、この料田の年貢四百文は真如寺へ出す事とあるので、下地権はこれまで真如寺に存していたのである。真如寺については長享二年九月文書がある。

出しおく真如寺事

右めいそう僧に渡付る者也、但出家之心中双身躰失付候てハ大樹寺御はからいたるべし、仍而為後日状如件、

長享貳年九月廿七日

（追筆）
道閑

長忠（花押）

西忠（花押）

「出しおく真如寺」とあるのは、真如寺領の一部を勢譽が出したとも考えられ、又「めいそう僧」とは、添書にある明瞭光譽を指しているのであろう。この間四十年間、明瞭は真如寺の住持であったのだらう。確認の為にここに名を記した様である。真如寺は内閣文庫『大樹寺文書抜萃』中にある末寺五十一ヶ寺の中にその名が見える。（以下末寺名の確認は上記の原本による）又平簀空閑院は末寺記載にあり「今改春光院」とあるので、『浄土宗寺院名

鑑』(一五三頁)によると松平町岩倉の地にあったものである。

同日付で道閲・祐泉連署の寺領安堵状がある。

大樹寺祠堂方江永代買得相傳之田畠之事并年紀地等、縦雖有天下一統之德政入、特ニ地起、於此祠堂錢并田畠等者、至子々孫々努々不可有違乱煩者也、仍而為後日支證如件、

大永八年_{子戌}二月三日

道閲(花押)

泰孝 祐泉(花押)

泰孝祐泉とは六代信忠の事であり、大永年間すでに七代清康に權力を移して、大浜に隠退していたと考えられるが、隠退している両者によって出された安堵状である。大樹寺祠堂方買得の田畠等について天下一統の德政を入れてはいけなとされている。

同年八月道閲寄進状がある。

寄進申はい田之事

合六斗五升者 作人金蔵坊

右寄進申所実正也、但彼下地ハ小南田名五反、石米式石成にて候、其内七斗五升真福寺へ年貢ニ納候、相殘意石二斗五升之内、有子細西都少納言ニ六斗出し置候、殘而六斗五升、当寺へ寄進申者也、於以後他之違乱あるましく候、仍寄進状如件、

大樹寺常住江寄進申所也、

大永八年八月廿一日

道閲(花押)

下地は小南田名五反で石米は二石成であるが、その内七斗五升は真福寺へ年貢として、六斗は内容は不明だが子

細あるによつて西都少納言へ納め、残り六斗五升分のみを大樹寺常住分として寄進している。作人金藏坊とは真福寺の僧坊である。『岡崎市史』（以下『市史』と略す）（第八卷五三五頁～五四五頁）によると真福寺は岩津の東にある天台宗の寺で、僧坊は六院あつて金藏坊・大善坊・柳池坊・楞嚴坊・座千坊・浄泉坊で、現存は金藏坊だけである。金藏坊は明応三年の同寺本堂建立についての内陣棟札に「作事奉行 金藏坊兵部卿賢忠」とあり、又仁王像の胎内には永正十二年の記録として「願主 賢忠金藏坊」とあり、真福寺僧坊中で重要な働きをしていた様である。作人は金藏坊で年貢納所先が真福寺とあるので、元は下地権を真福寺が所有していたものを道閲が手に入れて寄進したものである。

同年十月に売券がある。

永代賣渡申候畠之事

（異筆）
今へ年貢なし
合式まいた（田）在所大樹寺のまへ

右件之下地者、依有要用現錢貳貫五百文ニ永代賣渡申候処実正明白也、然者此畠之内より公方年貢貳百文御出申候、其ほかハし（諸役）よく御入なく候、さる間さかい者四方なから、みそをさかいにて候、此畠ニおき候て、子々孫々ニおき申、ゐらんわつらへ申候ハ、此賣状をさきとして、御あつかいをなされ候へく候、其時一言之子細申間敷候、仍為後日永代之賣状如件、

大永八ねつちのへ年十月吉日

賣主 鴨田助さへもん（略押）

在所は大樹寺前で畠二枚の売却である。年貢百文の納所を指示しているが、追筆によると一定期間を過ぎて年貢分を供出してしまった様である。

同年十一月に道閲安堵状がある。

泉松庵之事、如前住照譽、守諦一期者、諸役免除なし而可給候、於後々者庵主努々其儀有間敷候、然而当寺之儀聊於諸事不可有如在候、仍而為後日一筆令申候、恐々謹言、

大永八年十一月十六日

道闕（花押）

大樹寺まいる

道闕が泉松庵の事について安堵している。泉松庵という塔頭名は文書にのみ見られ、大樹寺に関する他の諸本には見られない。内容は前住照譽代と同じ様に守諦の一期の間は諸役免除であるが、以後の庵主については其儀無き様に言っている。守諦とは、No二三・二四（Noは文書目録による）に見える守諦と同一人物であるが、永正当時は大樹寺とあり、今泉松庵住持とあるので、大永頃は隠退して塔頭泉松庵に住していた様である。

翌享祿二年二月に売券がある。

永代賣渡申田地之事

合徳分式石九斗者升者庄升ニ定

在所へませくち式石壹斗、又伊賀はさま、とひのす、
こふか田、合八斗目

右件之田地者、某甲雖為先祖相傳之私領、然者依有要用、直錢廿五貫文ニ永代大樹寺祠堂方へ賣渡申事実正明鏡也、但彼下地ニハ公方年貢五月五百文、九月三百文、以上八百文之分伊賀之八幡禰宜方へ可有御沙汰候、其外者八幡領之事候間、無諸公事候、於彼田地者、至子々孫々迄違乱煩有間敷候、又、天下一統之徳政入候共、努々不可有相違候、仍而為日永代之状如件、

享祿二年 己丑二月拾六日

賣主 磯邊 御鍋（黒印）

この文書で注目されるのは売券の相手方として「大樹寺祠堂方」と記している事である。祠堂方としての名が登

場したのは、これが始めてである。内容は、^(換間)升は庄升定とし得分二石九斗を直錢二十五貫文で売却している。石米の内訳は在所ませくちが二石一斗、伊賀はさま・とひのす・こふか田合せて八斗である。公方年貢として五月五百文・九月三百文を伊賀八幡の禰宜方へ納所する様にと指示されている。諸公事は八幡領であるから免除されている。下地の大きさは不明であるが、最低でも五反は下らないであろう。伊賀八幡は大樹寺と一キロ余の距離にあり、在地は八幡の近辺と思われる。下地権は八幡にあり、得分権が売却されたものである。磯部は『市史』(第六卷二〇八頁)によると、往昔松平三代信光の子美作守家勝の住居した土地で、磯部の丸根城に住んだので丸根美作守と称した。現在の東蔵前村の一部であり、岩津と大樹寺との中間にある地名である。

同年十月に寄進状がある。

三木春林寺へ寄進申下地之事

合五反、石米拾俵成

右寄進申所実正也、但彼下地者佐々木如来寺領之内にて候へ共、春林寺為淨雲造立之間、寄進申所也、為御礼儀
三百疋請取申候、仍一筆如件、

享祿貳^丑拾月吉日

道閑(花押)

三木殿まいる

三木殿に宛てて春林寺を淨雲が造立する為に五反を寄進したもので、在地は佐々木如来寺領の一部である。寄進状であるが、道閑は礼として三百疋を請取っているのは珍しい。三木松平は七代清康の弟信孝が祖となっているが、年代的には清康ですら二十才にも達しない若輩であったので、信孝の時とは考えられない。三木の在地領主に宛て

たものであろう。春林寺は末寺五十一ヶ寺中にその名は見えるが、大破の部に属し今は確認できない。

同年同月に鴨田助さへもんの売券がある。前年に引続き、本年は畑を売却している。年貢指定されているが、前史料と同じく「今八年貢なし」と追筆され、同様の経過を経て大樹寺領となっていたのであろう。共に十月である所から、不断念仏にあたって売却を意図したものではなからうか。助さへもんは、大樹寺門前に住んでいた百姓であらう。

享祿四月二月に上和田七郎左衛門の書状がある。

可申入候

態一筆進し候、かの御したし(下地)の御事、我等おほせ御つけられ候事、すこしも(石米)こくまい御ふさた申候ハ、めしあけられへく候、その御ために一ふてを進申候、またかの御したし(彼)ハ(水損)すいそん之ところにて候間、わたなみのことく御させられ給へく候、恐々謹言、

うの
とし 式月吉日

(上和田)
かみわた七郎多もん(花押)

きやうろく四年

御てらさままいる

上和田の在地領主七郎衛門の下地の石米は無沙汰なく召上られる様に要望している。但し水損(洪水)のある地域なのでその時は考慮して欲しいとされている。『市史』(第六卷四四九頁)によると、上和田は東海道本線岡崎駅の北西にあたり、矢作川に近い地域にある。

次に、同年十月の松平岡三郎の寄進状では、宗樹軒の名が見られる。恐らく塔頭であらうが、泉松庵と同様に現在確認される塔頭名の中には含まれていない。文書中に出でくる名称である。

同年十二月に売券がある。

永代うり申下地之事

合田反、代拾貳貫文ハさい所むめ平
所当老石参斗貳升

右永代うり申處実正也、但彼下地ハ公方年貢二百文しつけ申候、しんふく寺へすくニ納所可有候、大樹寺方へ(真福)
志(嗣意)とうニうり申候間、子々孫々おいていらんわつらい有間敷候、貳百文の年貢より外ハ(参)よなる儀あるましく候、
(作)さく人ひこゑもん、但老升も所當之(無沙汰)ふさた候ハ、御とりあけ候へく候、其時さく人いらん申間敷候、何たるす
(水損)いそんかんはち入候共、すこしも御わひ事申ましく候、又天下一同のとくせいの、國々内、しんとくせい入候共、
これハ(嗣意)しとうの事ニて候間、彼下地にハ入申間敷候、仍為後日永代状如件、

うり主 井田与十郎

享祿四年かのとえ 十二月十五日

信廣 (花押)

井田三郎左衛門忠正 (花押)

同五郎さへもん頼久 (花押)

酒井藤七郎忠勝 (花押)

これは大樹寺祠堂方宛の売券である。酒井忠勝の名も見えるが、恐らく口入役として一役かっていたものである。売主は井田信広で、請判として井田忠正と頼久とが名を連ねている。内容は十二貫文で売られた田であり所当は一石三斗二升となっているが、その大きさは不明で恐らく三反はあったろう。公方年貢は真福寺宛に二百文納所の事とある。作人の名も見られる。在所むめ平については不明であるが、井田の地にあったものであろう。下地権は真福寺が握っており、井田の在地領主の信広に得分権があった田地を大樹寺に売却したものである事がわかる。

同年同月に売券がある。売主は井田五郎左衛門頼久で、請判として井田八郎二郎頼次が名を連ねている。在所や年貢宛所等不明な点が多い。但し、端裏書に「念仏衆中永代状」とあり、念仏衆に宛てたものである事がわかる。翌享祿五年三月に井田与十郎信広の安堵状がある。大樹寺宛となっており、恐らく昨年十二月の売却下地の事についてであろう。文中にある内膳殿とは五代長親の子松平信定の事であろう。

同年八月に寄進状がある。

永代寄進申候田地之事

合式反芻石成 在所安城

右永代寄進申候也、彼下地ハ淨圓はいは堂可申為志にて御座候、然上者於子々孫々菟角違乱有間敷者也、仍如件、

享祿五年^{壬辰}八月六日

松平彦四郎利長（花押）

進上大樹寺殿 参

この寄進状は淨圓の位牌堂の志として出されたものである。利長は五代長親の子で藤井松平の祖である。藤井は安城の真南で、北より古井・桜井・比目・小河に続いてあり、安城とは六キロ余離れている。『市史』（第六卷三九〇頁〜四〇二頁）参照。安城の在所ではあるが、大樹寺宛のものとして確認される。淨圓とは藤井甚九郎の法名で月桂淨圓と言ひ、享祿五年四月二十五日寂と『大樹寺過去帳拔書』にはある。

年末詳文書中に同月同日付で利長の添状と見えるものがある。

淨圓為心指候、安城にて田式反永代寄進申候、雖然此内六斗成ハ當秋うり渡申候、四斗計者甚九郎むけ志に^(イ、イ)仕候間、年記明申候ほとハ他足を以可申合候、聊無沙汰有間敷、何時も高濟寺迄屬可進候、但田地渡申きり候ハ、此方より不及申付候、先々芻反ハ渡申候、恐惶謹言、

八月六日

松平彦四郎利長（花押）

大樹寺殿様 参

これによりこの文書は恐らく享禄五年のものであると考えて良い。内容は浄円の心指として安城の田二反を大樹寺に寄進する。所当の内六斗は当秋に売渡すが、四斗については甚九郎にむけての志にするつもりであるから、年記が明けるまで待つて欲しい。一応一反だけは渡して置く事にする、とある。文中「何時も高済寺迄、扇可進候」とあるが、これは四斗の石米で扇にかえて高済寺に年記中差出するものであろうか。甚九郎は藤井とされており利長の一族であろうが、大樹寺の過去帳に見えているのに高済寺の名が文中に見えるのは何故であらうか。恐らく高済寺で弔いをうけ年記は高済寺でつとめたのであろう。大樹寺過去帳に甚九郎の名が見えるのは、この享禄五年八月六日以降の事と思われる。高済寺と大樹寺が同一紙面に書かれるのは始めてである。この文面によると、高済寺は安祥領内にあったもので、大樹寺との関係は不明であるが、末寺記載にはその名がみうけられ、安祥内ではかなりの得分権を持っていた様で末寺としては大きかった事が窺える。大樹寺勘定注文は存在しないので比較は出来ないが、明応初年の高済寺勘定注文（別表に概略あり）の内訳で見ても寺領がどれ程確保されていたかがわかる。勘定方・納所方として、どの程度大樹寺に関与していたかについて不明なのが残念である。ともあれ、高済寺は安祥領内ではかなりの勢力をもつ大樹寺筆頭末寺であった事が予測されよう。

同年十二月に売券がある。

永代賣渡申畠之事

合老貫文者、年貢三百文め

在所
御寺之下

右彼畠八年具め三百成を代老貫文永代ニ賣渡申候處実正也、但於彼下地ハ死道へ永代賣渡申候之間、於子々孫々

三河大樹寺寺院形態の具体像

違乱煩有間敷候、もし岡崎殿新徳政入候共、菟角之儀申間敷候、仍為後日永代状如件、

享祿五年^{壬辰}十二月三日

大樹寺 まいる

井ノ口彦左衛門 (花押)

これは年貢三百文の畠を一貫文で売却したもので、在所は御寺の下とある。畠の年貢として三百文ならば下地面積は大きい筈であるが、代錢一貫文はそれに見合う額ではない。恐らく年貢三百文の下地権の売却であろう。又「死道」とは恐らく祠堂の事であろう。

翌天文二年二月に上田源助及び上田宗太郎清房の天蓮社秀誉上人宛の書状がある。

小針左京進年貢目、嶋田平三殿より永代買徳仕候、就其百貫文御取替忝候、然者為其相當、清金名田末代進之候、於子々孫々違乱煩有間敷候也、為後日之状如件、

秀誉 (花押)

(黒印)

天文二年^{癸巳}二月十四日

上田 源助 (花押)

天蓮社秀誉上人様

まいる

(黒印)

上田宗太郎

清房 (花押)

内容は小針左京進の年貢目について嶋田平三より買得した際に肩代りしてもらった百貫文に対する相当分として清金名田を末代秀誉に進上するとある。

又同日付で清金名坪付が出されている。

清金名坪付

一反 町田 五斗

一反 つか原 五斗

一反 なはて崎 五斗

一反 あはら田 四斗

一反 こいなはの下 四斗

一反 同在所 四斗

一反 堀口 四斗五升

一反 同在所 五斗五升

壹斗五升 こいなはの下

壹斗五升 ほりくち

屋敷 六百文目 山畠一まい

五斗目五反 在所五反田 九郎左衛門尉

五斗目壹反 在所一つか 九郎左衛門尉

五斗目壹反 在所よこ枕 九郎左衛門尉

右彼七反末代進之候、仍如件、

天文二己二月十四日

天蓮社上人様まいる

三河大樹寺寺院形態の具体像

上田 源助(花押)

上田宗太郎

(裏書)

清房(花押)

秀白讓置候

(黒印)

秀譽(花押)

(黒印)

これによると、八反合せて三石七斗と他に反數不明三斗で合計四石の石米・屋敷六百文目・山畠一まいが勘定されている。又九郎左衛門尉給田として七反で一石五斗が計上されている。この内九郎左衛門尉給田については「末代進之候」とされている。在所名の内、堀口・横枕は明応の弘濟寺勘定注文にも見られる。一反の石米は四斗から五斗五升まである事がわかる。いづれも安城領内の事であろう。小針左京進については不明であるが、小針の在地名は確認され(『市史』第六卷三三九頁) その在地領主であろう。上田源助・清房についても不明であるが、小針郷には「上田万五郎元次の住めりと云う古屋敷址がある」とされ、上田姓が小針に関連して存在する以上、文面の上田もその一族と考えられる。又上田源助は、天文五年十月付浄珠院文書の連判(『市史』第一卷三〇〇頁と三〇一頁間の写真版参照)にその名が見え、花押から推して天文十五年二月十日付文書に見られる上田七郎兵衛尉元成と同一人物である。次に坪付の裏書にある秀白は秀譽の弟子筋にあたる人であり、この坪付は秀譽の譲り状としての役割も果している。秀譽については大樹寺世代にその名は確認されないが、百貫文の肩代りの出来る財力は個人としてではなく背後に大きな存在を想像させる。

同年同月末に売券がある。

永代賣渡申下地之事

合六貫七百元者 大門前三反、所當壹石四斗、年具七百元
藪田南山道三反、壹石、年具八百文

右永代賣渡申處実正也、但在所三作式反年具七百元、山道三反年具八百文、合壹貫五百文目、賣渡申候、作式
ハ大門元忠引得にて候、少も無沙汰候者、下地を可被召上候、我々於子々孫々違乱有間敷、仍為後日借状如件、

天文二年癸巳二月廿九日

真福寺桂林坊

大樹寺 参

榮正 (花押)

井口右馬允親家 (花押)

これは代錢六貫七百元で計一貫五百文の年貢目について売却したものである。在所は二つあるが、所當の作職は
共に大門元忠の手にある。下地権についての売却である。桂林坊は、先到大永八年八月付文書についての考察中に
取上げた真福寺六僧坊の内にその名は見えないが、あきらかに僧坊であり新たに付加えるべきである。新家は井
口の在地領主と考えられる。藪田・大門共に大樹寺の西の在地である。同文の写しも残されている。

同年十二月に売券があるが、別表によりその概要を確認してもらう事とする。大樹寺祠堂方への売券である。
翌天文三年十一月に売券がある。

永代賣渡申田壹反畠壹反之事

合代八貫五百文者 在所ひなまへ、たかくろ、
田壹反米五斗五升成、畠壹反七百元め

右彼下地者永代賣渡申所実正也、但彼之於田畠公方年貢、毎年百文つゝ無沙汰なく賣主の方へ可有御納所候、彼
下地有間敷事にて候へとも、永代之上におかき殿新徳政御入候とも、於此下地ハ別而申合候間、其上にても菟
角有間敷候、仍為後日之末代賣状如件、

天文三年甲午年十一月廿七日

中根弥五郎重次 (花押)

代銀八貫五百文で田一反と畠一反とを売却している。宛所は不明である。公方年貢を田畠百文づつ売主方に納所の事とある。在所のひなまえ・たかくろの内、ひなまえは日名前で伊賀の西方の地名である。（『市史』第三卷三四七頁）中根氏は正長年中以来、伊田の東方山中の坂田・田口・箱柳（『市史』第六卷一八七頁・一九四頁）・小呂（『市史』第三卷三三五頁）に居を構えていたとされているが、この文面により矢作川畔にまで進出して下地権を握っていた事がわかる。又この文書は永禄四年三月付文書の本券にあたるものである。すなわち

為漢蒼祠堂寄進申田畠之事

合六斗者 在所日名前、升ハ大升五斗五升ニ而候へとも祠堂升にて納候へん間、六斗ニ相定候

畠壹反七百文目、公方年貢百文、中根弥五郎方へ納所候、

右寄進申所実正也、若自何方とかく申ニ付候而者、彼以證文、御理可被仰分候、仍為後日如件、

永禄四年辛酉三月十九日

京順（花押）

大樹寺祠堂

とあり、文中の「證文」にあたるのである。

同年十二月に大樹寺祠堂方への売券があるが、概略は別表にゆだねる事とする。

翌天文四年正月に売券がある。

永代賣渡申候田地之事

合壹段者 在所上田所当五斗成也

右彼下地井田鳥山三郎左衛門方より永代白清被買候て、我等ニ給候へ共、本文を取そへ、大樹寺殿様へ永代四貫式百文ニうり申候處実正也、但シ彼下地之内より公方年貢百文鳥山三郎左衛門方へ御沙汰可召候、其外ニ別儀諸

役有間敷候、若何方よりも被申事候者、彼状と三郎左衛門本文を御出候て、可被仰分、仍為後日借状如件、

天文四年^{未乙}正月吉日

賀藤主計忠久（花押）

大樹寺玉譽様^{まい}る

これは代錢四貫二百文で田一反（所当五斗成）を大樹寺玉譽に売却したものである。公方年貢百文は鳥山三郎左衛門方へ納める事とある。下地についてのコメント中に、「本文を取そへ」とあるが、先の永正九年十二月付の宛名無し文書がここで言う本文にあたっている。

永代うり渡申田地之事

合寺段者、在所上田斗代五斗目

右彼下地ハ永代代四貫四百文ニうり渡申所実正也、左様ニ候ハ公方年貢毎年百文つゝ御さたあるへく候、諸公事あるま敷候、我々於子孫いらんわつらい申間敷候、菟角申候子細候ハ此状を御ひらき候て、永代めされ候へく候、仍後日うり状如件、

永正九年^{未乙}十二月廿七日

鳥山三郎左衛門忠正（花押）

この永正九年の時点で作職が鳥山より白清に移動したものであり、鳥山は天文四年現在でも下地権は保持している。在所の上田は井田の近辺である事がわかる。売買値については変動がみられ所当は同じであるのに、永正九年より二百文少ない値で売却されている。地価が下ったものか、さもなければ大樹寺玉譽の為に値を下げたものか、判然としないが貴重な例である。天文四年の文書には写しも残っているが、写しには鳥山三郎左衛門「尉」となっている。

同年十月に売券がある。

永代賣渡申下地之事

合九斗成代 在所池内きろ
六貫五百文ニ者

右永代賣渡申處実正也、但彼下地ハ所當九斗成を公方年貢に式斗五升引候て、代六貫五百文ニ賣申候、年具五百文つゝ毎年地頭かたへ可有御納所候、若天下一同之御徳政入候共、於子々孫々菟角違乱煩有間敷候、仍為後日永代狀如件、彼下地ハ賣引へに仕候者、米九斗つゝ年々沙汰可申候、

天文四年乙未十月一日

井口彦左衛門（略押）

大樹寺念佛講 まいる

同 弥七郎（略押）

所當九斗成の下地を代錢六貫五百文で大樹寺念佛講に売却している。公方年貢は九斗成の内二斗五升を引いてそれを五百文と換算して地頭方へ納所の事とある。二斗五升が五百文にあたり五斗で一貫文となるが、石米五斗田一反には一貫文の、石米四斗田一反には八百文の価値がある事を知り得る。一斗は二百文であるというのは、一般的な換算率として石米と文錢の相關關係を簡単に把握するのに都合が良い。売主両者は得分權を持つ中小名主であり、在地地内きろは井ノ口辺にあったものであらう。念佛講宛となっている所から時期的に見て不断念仏にあたつての売買であつた様である。

翌天文五年十月に寄進狀がある。

寄進狀之事

合如来寺領 日記別有之

右寄進申所実正也、但彼年貢分ハ百貫文借錢を申候、此儀をもちて返弁申候、其以後者造栄分として寄進申所也、子孫ニおいて違乱煩あるましく候、仍一筆如件、

天文五年丙申十月日

道関（花押）

進上大樹寺侍者御中

如來寺領を大樹寺に寄進している。但し年貢分については、以前に百貫文借りていた分が返弁し終って以後、造榮分として寄進する事となる。すなわち、如來寺領を寄進する肩代りに百貫文の借用を帳消しにして欲しいと言っているのであり、名目は寄進となっているが、實質は百貫文で売却したのと同じ結果になっている事がわかる。日記は別に有りとされ、明細が不明なのが残念である。ともかく如來寺領の下地権を大樹寺が確保した事になる。

同年十一月に売券がある。別表により概略は分るであろうから省略する。

同年十二月に売券がある。

永代大樹寺念仏講賣渡申下地之事

合

在所たけはな
四斗め

右彼下地所當四斗め、參貫四百文ニうり申候處実正也、但此内六升者年貢二百文おき申候、（眞福寺）
（金藏）
しんふくしこんそう
（庄）
ほうへ御なし可有候、しやう升にて御座候、徳政入候とも是ハ入ましく候、後日状如件、

天文五年ひのへ極月廿三日

（藪田）
やふた

大樹寺念仏講まい

八郎二郎（花押）

所當四斗目を代錢三貫四百文で念仏講に売却している。所當の内六升を庄升で年貢として百文とし、眞福寺金藏坊に納める事とある。八郎二郎は藪田郷の作人であり、在所たけはなは藪田の地にある。下地権は大永八年八月付文書にも登場している金藏坊の所有している所である。先の換算率であれば百文は五升到当たるが、庄升では六升になっている。升によって百文は五升より増減があるからである。

翌天文六年九月に寄進状がある。

寄進申下地之事

合三斗者 寺升

大樹寺参

右寄進申処実正也、浄忠・昇林・非多為三人菩提、末代共寄進申也、在所やふ田南山道と申処也、作人伊口彦左衛門にて候、仍定処如件仰、
(マ)

無多(花押)

天文六酉年九月十七日

与三郎(花押)

寺升にて石米三斗成を、浄忠・昇林・非多の三名菩提の為に寄進している。在所は藪田南山道で伊口彦左衛門が作人となっている。彦左衛門は、大永二年十二月付・享祿五年十二月付・天文四年十月付・天文八年十二月付のそれぞれ文書に見られる売主と同じであり、耕作を主とするが得分権を握っている中小名主と考えて差支えない。となるとこの天文六年文書の寄進主兩名は下地権を寄進した事になり、三斗は年貢分と言う事になる。藪田は大樹寺の東北の地にある。

翌天文七年三月に祠堂分田地注文表がある。

大樹寺祠堂分之田地

①田式石九斗代、代廿五貫文 磯邊ノ御鍋

②門前畠二枚、代貳貫五百文 鴨田助さ衛門

③同畠一枚、代二貫二百五十文 同助さ衛門

④田五斗代、代四貫二百文 井田ノ三郎さ衛門
百文年貢へ出

⑤ 田四斗五升代、代四貫五百文 鴨田ノ新五郎

⑥ 田八斗五升代、代八貫五百文 形原三郎さ衛門

⑦ 田八斗五升代、代七貫文 鶴田彦一郎

二百文年貢へ出

真福寺

⑧ 三年貢一貫五百文、代六貫七百人 桂林房

(追筆)

種々調候而天文廿一年ヨリ田地へ取置候ヨリナル

石代、二石六斗致度

⑨ 年貢三百文、代老貫文 井口彦さ衛門

以上六十一貫六百五十匁

祠堂錢

廿貫文 酉年九月ニ渡申候

老貫文 鶴田年貢買得仕

五貫文 三具足一莊

式貫文 是ハ祠堂之外 馬代 常住之乗馬
三疋之内

以上廿八貫文敷

天文七年 戊戌三月十八日

(端書)

大樹寺參

三河大樹寺寺院形態の具体像

(玉誉)

(花押)

玉 誉

五三

文中の算用数字①～⑨は便宜上筆者が付けたものである。九件の買得田地について記してあるが、二件（⑤と⑦）を除く七件については売券状の存在が確認される。すなわち、①は享祿二年二月付、②は大永八年十月付、③は享祿二年十月付、④は天文四年正月付、⑥は天文三年十二月付、⑧は天文二年二月付、⑨は享祿五年十二月付の文書と売券内容が一致するのである。本論中に引用していない文書については別表を参照願いたい。さて、年代的に見れば、早いものは大永八年（一五二八）で、最新のものは天文四年（一五三五）である。①～⑦は田畠得分權の買得であり、⑧⑨は下地權の買得ゆえに年貢目が記されてある。④⑦については年貢目を記入しているが、他には記載されていない。②③の売券状本文の場合、「今八年貢なし」とされているが、この注文表に記入が無い事から考えると、「今」とは天文七年にあたり、この当時に追筆されたと考えて良いと思われる。但し①の売券状本文には八百文の年貢が記されているが、この注文表に記されていないのは何故だろうか。恐らくこの時点で年貢なしとなったのであろう。④の項で売主は井田の三郎さ衛門となっているが、④の売券状本文での売主は賀藤主計忠久であり、その売券状本文の検討で触れた永正九年十二月文書の売主が井田の鳥山三郎左衛門なのであるから、この場合売主の記載事実不明な点が存在する。その他の確認できる売券では売主名はこの注文表の記載と一致している。

次に⑤の項での記載内容は天文二年十二月付文書と似ているが、内容に相違がある。天文二年十二月付の売券では、はっきり「大樹寺祠堂方へ永代売渡申候」と記されており、天文七年以前の買得地であり、当然この注文表に含まれるべき売券である。内容としては、石米として売券中の五斗五升が注文表は四斗五升となり、代錢として売券中の四貫七百度が注文表は四貫五百文となっている。天文二年から天文七年の間にこの差異を埋めてくれる文書はないが、注文表が天文七年に現実に作製されたものであり、大樹寺が直接入手出来る斗代は四斗五升であろうか

ら、今は注文表の事実を正当とみなしておく。かつ⑤の売券状本文については天文二年十二月付文書を当てる事にする。又この注文表で嶋田と読んでゐるが、売券本文を考慮するならば、細井とは読めないにしても、書き直して細井と書いた形跡は読みとれる事をここに記しておく。以上により、注文表に見られる買得田地の九十パーセント程は、その本券が確認された事になり、大樹寺文書自身、文書残存の頻度の高いこの頃にはかなり精確な形で文書が残存していると言えよう。

⑧に追筆されている事実に触れておくと、天文廿一年以降この田地は大樹寺のものとなるが、これを裏づける文書は存在しない。又天文二年二月付の売券状本文で所当は合せて二石四斗を計上しているが、注文表追筆には二石六斗とあり二斗増している。この事は天文二年から廿一年までの二十年間で、五反田地につき二斗程増産する事が出来た事を物語っているものである。この事実から田地收穫の増産を窺い知ることが出来る。

さて注文表総体を見ておくと、代錢六一貫六五〇文で買得した田畠等は石米五石五斗五升と畠三枚と年貢目一貫八百文である。先の換算率を適用すると、畠三枚と十二貫九百文あるいは六石四斗五升にあたる。他に祠堂錢支出として廿八貫文が上げられている。この内、鶴田年貢買得に一貫文支出しているのは、⑦の年貢分を一貫文で買得したのだとも考えられる。又支出の内二十貫文を渡したとあるが、他にそれを確認する文書はない。以上合計八九貫六百五十文が、祠堂錢の内から天文七年までの十年間に支払われた額である。大永八年二月付の道関・祐泉による安堵状によつて、それ以前の大樹寺祠堂方買得田地は安堵されて居り、十年後の天文七年にも再び安堵される為注文表が作製されたと考えられる。先の大永八年には注文表は存せず、今天文七年には逆に安堵状が無い。しかしこの注文表に記載されてある買得地に関する売券状本文の年号の内、最も早い年号が大永八年であり、この塚が何故設定されたかを考えてみると、大永八年二月付の安堵状が区切りとなつている事は否めない事実である。

この天文七年までの間、他に大樹寺宛の売券が存在しているが、この祠堂分田地から除外されている事実から次の事が言える。天文四年十月付・天文五年十二月付の売券の宛所は念仏講となっており、念仏講が代錢九貫九百文を出して買得したもので、祠堂方とは独立した経済機関としての念仏講の存在が窺える。又天文五年十一月付の売券の宛所は大樹寺資堂善玉となっているが、これは祠堂方の役僧ではあったが個人として善玉が代錢三貫八百文で買得したものである事がわかる。

所でこの注文表を出している玉譽はこの年を以て文書中に現出しないが、大樹寺第六世の住持としての地位は何時の頃であつたろうか。『御当山世代記』では天文五年没とあり、これは誤まりである事は分るが、天文八年十二月付の売券の段階では、第七世泉譽の名が出て来る。注文表の文面から推すと、宛名は大樹寺宛であり玉譽は祠堂方の長として存在している様に思える。大永八年十二月付売券によると宛所は泉譽であり、文中には大樹寺祠堂方へと出て来る。或いは天文八年で泉譽に祠堂方の職掌が引継がれたとも考えられる。文書からは分析しきれないが、常住或いは住持職という職掌は祠堂方と密接な關係にあった事はわかる。玉譽の前住である第五世眞譽自身の手になる文書は存在しないので、はっきりと常住と祠堂の区別は確認されない。が、玉譽が天文八年以後住持として存在する為には没年を更に延ばさねばならず、当を得た解答としては、祠堂方の長はすなわち住持につながると捕えても良いのではないか。住持在任時期の問題は、以後存在している文書においても厄介な問題として出て来る。

同じ天文七年十月に寄進状がある。

永代奉寄進田地之事

合老反六斗代 在所大津堂之後
升者蓮花寺之升

右件田地者、半一郎買得相傳之下地也、然に為祈彼菩提、寄附玉譽者也、然而拙者又為彼聖靈、大樹寺江永代奉

寄進處也、爾者待慈代之下生、無退転被備月靈供、随分可預御廻向候、仍而為後日支證之状如件、

天文七年 戊戌十月廿八日

玉簪（花押）

寄進施主山岡半左衛門忠兼（花押）

大樹寺 參

文面によると、田壹反（所当六斗代）は山岡半一郎の買得相伝の下地であるが、これを山岡半左衛門が半一郎菩提の為に玉簪に寄進し、更に玉簪も又半一郎聖靈の為に大樹寺に寄進している。「被備月靈供、随分可預御廻向候」とあるので月靈供米寄進と言う事になる。在所の大津堂の後は不明だが、蓮花寺升とある蓮花寺は、『市史』（第八卷五二八頁）によると滝山寺の境内にその寺名が見られ、在所も滝郷の内であろう。寄進施主として山岡忠兼も花押をのせるが、山岡氏は何処の人か不明である。この文面からすると、一度玉簪の手に渡って以後寄進した様であり、寄進施主の花押は証判にあたるものである。住持個人の所有物としての田地の存在がここでも窺える。

以上玉簪代について大永八年より天文七年までの文書を検討して来た訳であるが、この間の田地集積についての総括をしておく。売券については、九九貫一五〇文の代銭が確認されるが、祠堂方の代銭としては八五貫四五〇文である。所当については、確認できるだけでは総計九石六斗七升と畠三枚と三貫五〇〇文であり、祠堂方以外のものである一石八斗を除外した七石八斗七升が所当分で確認できる石米となる。不明分を一貫文Ⅱ五斗として計算すると、祠堂方買得田地の所当分は九石一斗二升と予想できる。又買得による年貢分支出は一貫七百文で、内祠堂方関係は九百文である。これは毎年の支出分として計上される分となる。

一方寄進状については不明の部分が多いが、反数にして六反が、所当として二石五斗五升が、実数として把握さ

れる。又年貢分も実数で一貫四〇〇文を確認できる。所が実際には百貫文の担保としての如来寺領の寄進があり、空閑院料田も大きさは不明で規模として割合大きなものを想像させるものがあり、所当には大幅な修正を余儀なくさせるものである。

ともあれ、一応実数としては祠堂方の所当石米だけでも十一石六斗七升が確認される事になる。但し代錢百貫文余りは確実に大樹寺内部から出されたものであり、又着実に祠堂錢を有効に使用して田地買得に努めていた姿は想像される。しかし、如来寺領を担保に百貫文貸与したり、天蓮社秀譽個人が百貫文貸与出来る事を考えるならば、この十一年間での買得経過は貧困を極めるものであると言わねばなるまい。まずはこの時期において、大樹寺においては住持自身寺の經濟を掌握しつつ寺院經營を着実に進める様になったと考えるのが妥当であろう。

結 語

以上結果的には文書の検討のみに終始してしまつたが、本論の様な考察の仕方は大樹寺を捕えるにあつての最も基礎的な作業であると思つてゐる。この様な考察なしに大局的な見地で大樹寺を捕える事については、なお異論の出て来る所となるであらう。私はこの様な文書考察に終始する中で、第Ⅰ期から第Ⅴ期までを修士論文で確認した。文書に関して事実関係のみに注目して編年的に論を進めてみて、その作業の中で、大樹寺の經濟行為だけでなく、それを取り巻く在地領主・中小名主・百姓の姿や位置づけ及び在地の存在地域の設定と広がりが明確になつた事と考へてゐる。

私は本論文では、修士論文中の第Ⅱ期第二項前半についてのみの確認を行なつたのであるが、この様な作業を通して得られた知識について、大樹寺文書の全体的な総括のみを最後に示しておきたいと思う。

最初に田地集積の総体について捕える事とする。

寄進状関係

第Ⅰ期 石高一七石六斗五升・文高三貫二〇〇文、他に田畠一町七反・屋敷・林・真如寺領

第Ⅱ期 石高七石三斗五升・文高二貫九〇〇文、田一町二反・野一所・屋敷焼香分・如来寺領・空閑院料田

第Ⅲ期 石高一三石七斗五升・文高三貫三〇〇文、家屋敷

第Ⅳ期 石高三石六斗・文高二貫九〇〇文、他に坪付十貫文も大樹寺方のものとして良からう。

第Ⅴ期 石高四石一斗・文高八〇〇文、田二反・米十二俵

以上総計すれば石高四六石四斗五升・文高五三貫一〇〇文、他に田畠三町一反・米十二俵がある。更に石高不明分として屋敷・林・真如寺領・野一所・如来寺領・空閑院料田などがある。

売券状関係（買得田地）

第Ⅰ期 田五反半

第Ⅱ期 石高一四石二斗七升・文高四貫四〇〇文、田二反・畠四ヶ所

第Ⅲ期 石高五石九斗

第Ⅳ期 石高二石五斗二升・文高一貫五五〇文

第Ⅴ期 なし

以上総計すれば、石高二二石六斗九升・文高五貫九五〇文、他に田七反半・畠四ヶ所がある。

他に担保の為に得ている石高が一石六斗五升あるが、これも大樹寺方になったものと考えて良からう。更に第Ⅰ期及び第Ⅲ期には高濟寺注文表があるが、この場合合計総数には若干相違があるので、第Ⅲ期でみられる文高四二

貫七五〇文を平均的數値とみなして抽出することにした。

以上担保・高濟寺注文表・第Ⅴ期注文表をも含めて、石高では八二石一斗四升が、文高では一〇一貫八〇〇文が實數として捕えられる。文高の分を一斗 \parallel 二百文の勘定で換算してみると、文高は石高五〇石九斗となる。一斗 \parallel 二百文の勘定は各所に確認されたので、大樹寺における換算値と見て良いであろう。すなわち、石高計算では一三三石四斗が計上される事になったのである。他に換算値を設ける事によって石高計算できるものとして、俵一・二俵・田畠三町八反半が残されている。俵は一応一俵 \parallel 二斗五升が大樹寺文書考察に際しての基準値である場合が多かったで、それによれば石高三石となる。田一反については平均値は五斗成であるうが、実際には四斗から七斗までの幅があり、又畠方はそれ以下の數値となる事は確實である。今は三町八反半と畠四カ所とを合せて、平均値一反 \parallel 五斗を三町八反半に適應しておくとして石高一九石二斗五升に勘定される。

これらも加えると、総石高數は一五五石二斗九升とされるのである。俵數にすると、一俵 \parallel 二斗五升として約六二俵となる。これは大樹寺常住分・祠堂分・寮舍分・末寺分などの文書にあらわれた實數全てについての計算し得る石高總數である。

天正十七年の寺領書上げによる俵數總數は八五六俵となっている。すなわち一俵 \parallel 二斗五升として二一四石という事になる。この額が納所方のみの石高だとすれば、先の石高總數は比較するべき性格のものではなくなる。しかし、單純に計算すれば五八石七斗一升の差であり、これならば屋敷や末寺領などを合せれば補いうる額となる。

『仏教論叢一三號』（二五頁）の宇高良哲氏の指摘によると、八五六俵には寮舍方の分が含まれておらず、それを含めるともっと多くなるとされている。しかし、この二百石強の石高にいくら寮舍分を加増したとしても、慶長七年の朱印状石高の六一六石四斗三升には程遠いと言わざるを得ない。

今文書を通して得られた一五〇石余の石高は大樹寺領の絶対数とは言えず、朱印高の四分の一にしか相当しないものである。文書考察を通して最も不審な点は、大檀那である松平四代親忠の寄附行為の貧困さである。大樹寺を開基するに当って寺領の保証がないという事は考えられず、いくらかの寺領が与えられていたであろう。文書を通しては着実に零の時点から出発する他はなく、この論文には初期の基盤が存在しない形で論立てするという無理があるのである。

又私は末寺領をも包括する中で大樹寺寺領は増大して行った事を論じてみたのであるが、これらの末寺領は所々に散在していた筈である。文書によると、例えば安城領内の古井・佐々木を中心にした在所や小針辺の在所があり、額田郡内でも岩津・細川方面の在所や大平・丸山方面の在所があった事になっている。所が、慶長七年の朱印地は、大樹寺村と鴨田村とに限定されて六百余石の石高を上げている。何故大樹寺が確得したであろう所々の在地について触れられていないのだろうか。大樹寺寺領としての所々の在地は慶長七年の時点で整理統合されて、大樹寺の周囲に寺領を集めたものかもしれない。末寺五十一カ寺記載の内、二十八カ寺は大破の部に含まれているが、これら大破末寺の寺領は大樹寺が本寺として確保した事は充分考えられる所である。大破寺院の一部が文書にのみその名を残し、大半は位置すらも不明なまま歴史の流れの中に埋没しているのである。朱印高六百余石との差違をうめ得るものとして、開山当時の寺領及び末寺寺領が大きな割合を占めるものとして考えておけば良いであろう。

一応文書検討の結果実数として百五十石前後の石高は完全に確認できたとしておく。

次に住持自身の動きであるが、表1での斜線部が世代の推移となる。第Ⅱ期第二項での玉誉・泉誉・宝誉の流れは大樹寺にとって貴重なものとなっている。この三代は経済基盤としての田地集積を順調に行ない、寺領を確実に増大させている。買得行為から見ても五つの期間中で最も多い。代銭の支出も安定的に供給されている事から見て、

祠堂方という経済機構にも安定感があつた様で、寺院経営の仕組が充実に端所となつていた様である。天文四年前後に大樹寺の復興が成し遂げられた事とも合せ考えると、最も順調に寺院経営が進んだとみて良いであろう。次の第Ⅲ期の鎮誓は更に輪をかけて寺院経営には積極的だった様である。寺院自身は戦乱の中にあつて荒廃する事もあつたであろうが、鎮誓は今川氏が三河支配を続ける中で再々安堵状を取りつけており、寺院経営に支障をきたす事なくその任にあたつたのである。この時期には末寺寺領に關しての介入が進んでいる。本末の關係は具體的にはっきり把握し得なかつたが、末寺領への介入ははっきり確認できた。この様な現象は次の第Ⅳ期進誓代にも続いている。しかし三河国で最も安定した寺院経営が行なわれる様になる為には、家康の三河経営の時期を待つ外はなかつたのである。以上の中で、活躍してゐた住持は單に著名な鎮誓・登誓だけでなく、玉誓・泉誓・宝誓・進誓も又かなり積極的な寺院経営を行なつてゐた事實を確認する事ができる。私はこれらの在野の僧侶の存在を高く評價しておきたい。

次に寺領地域であるが、特に大切なのは安城領内の古井周辺地の存在である。古井地域は、大樹寺周辺地と並列し得る程に何度となく文書に出てくる。大樹寺領は、初期の頃から大樹寺周辺（井田野の地）及び古井周辺の二つが存在する。大樹寺周辺地は寺領として当然多く存在しようが、何故古井地域が選別され大樹寺領となつたのであるうか。これは問題提起にとどめておく事にする。未だ人名などに不明な点が残つてゐるからである。

次に寺領の下地権についてであるが、真福寺及び滝菩提坊が年貢宛所として比較的多く出てくる。両寺が下地権を保持しながら、所当分についての得分権は大樹寺に進出されてゐた事になる。真福寺三五〇石・滝山寺六〇〇石は兩寺の近世における朱印高であり、規模から言えば大寺の部に属する。疑問の余地は残るが、或は寺領の得分権は誰に譲られ様が下地権保持者からの圧力は別になく、得分権保持者は自由に得分権を移動させる事ができた、と

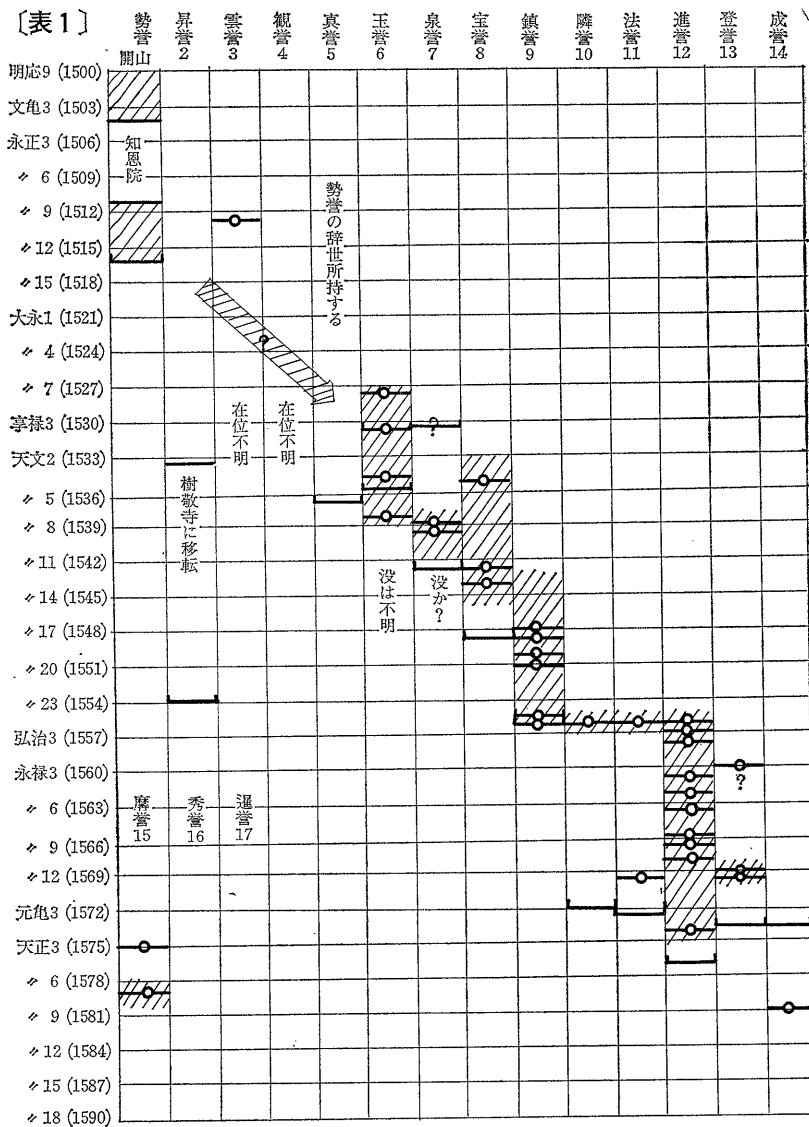
考えても良いであろう。

以上修士論文で得られた知識を極く大まかに抽出しておいた。

本論中では大樹寺の十一年間の動きにのみ注目して論を進めてみたが、大樹寺の歴史的な意味での具体的な寺院形態はこれらの作業の積み重ねの中で浮び上ってくるものである。ともあれ、大樹寺像の一端を文書を通して紹介する事が出来たと、私は思う。

最後に発表の機会を与えて下さり、文書指導にあたって下さった水野恭一郎先生に感謝の意を表します。

〔表1〕



註一印は『世代記』による没年

○印は、文書・諸本により確認される年

//// 斜線は世代在位推定期間

〔表 2〕

末寺51ヶ寺（内閣文庫『大樹寺文書拔萃』による）〔但し五十音順〕

㊦	3	16	阿弥陀院. 安価院. 安養寺								
㊦	4	6	空閑院.	218	弘誓院.	618	源空院.	716	香樹院. 観音寺. 玉洞院.		
			高済寺.		弘西寺.		光秀院.	2022	光忠寺.		
㊦	12	5	1417	西方寺.	53	西林院.		春光院.	814	松応寺. 常行院. 正樹寺.	
			1115	清浄院.	7	浄土院.		称名院.	9	松林寺. 212	
										31	真如寺. 随念寺.
			2221	三光院.	176	春光院.		春林寺.	2423	松林院. 44	松明院.
			17	随応院〔浄土院の事〕							
㊦	2	4	259	大通院.	1510	長寿寺.		大導寺.		長合庵.	長泉寺. 洞泉庵.
㊦		1		如来寺.							
㊦	2	8	1912	宝泉院.	1213	菩提寺.		13	長谷寺.	万徳院.	普応院. 遍照院.
			2320	法王寺.		法泉寺.		法蔵院.		宝林寺.	
㊦	3	1	19	来迎院.	1811	了雲院.		265	蓮生院.		10
											来迎寺

23 28 = 合計51ヶ寺

註。〔 印 〕 は、その右側が「大破の部」とされるものである

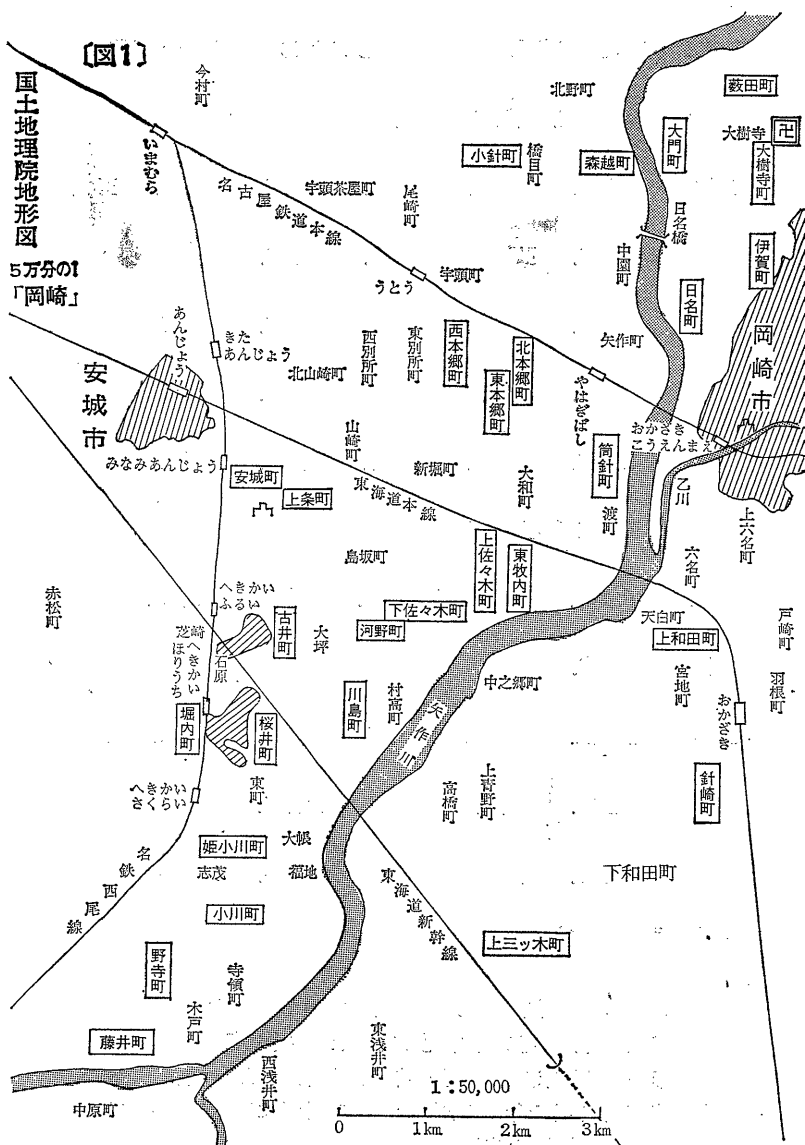
。〔 / 印 〕 は、『大樹寺文書拔萃』に含まれない寺院名

。〔 ① 〕 は、『諸末山由緒書』の寺院記載順番号〔23ヶ寺〕

。〔 1 〕 は、宝永七年（1710年）大樹寺書上げに連署している末寺の記載順番号〔26ヶ寺〕

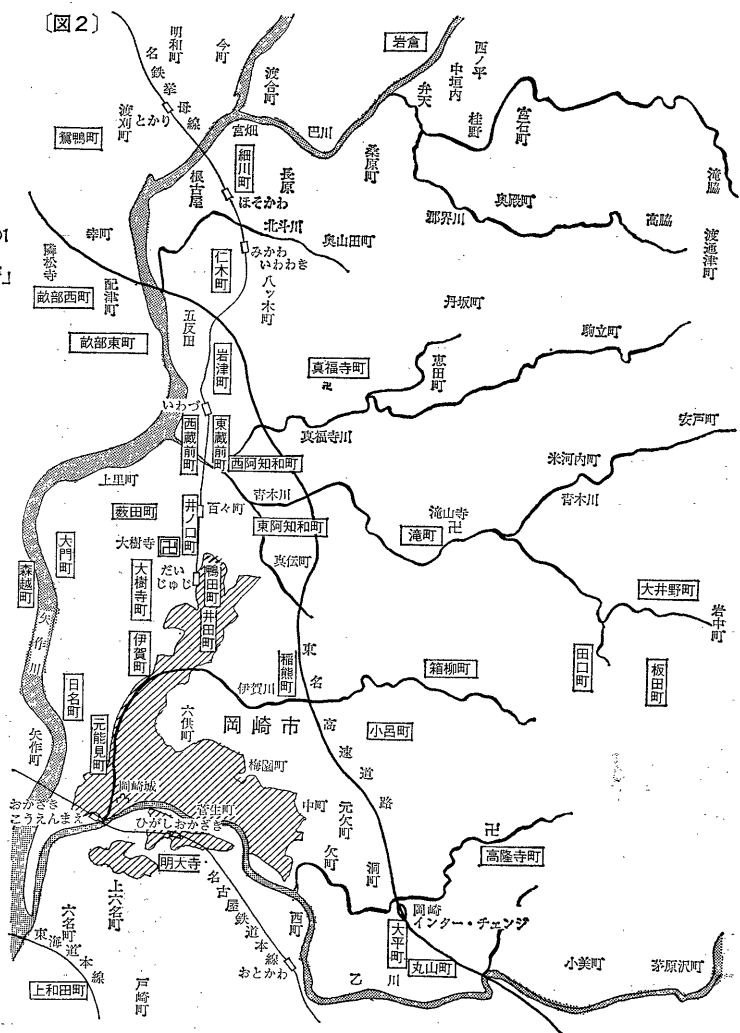
国土地理院地形图

5万分の1
「岡崎」



国土地理院地形図

5万分の
「岡崎」



大樹寺文書整理表

※文書形式の略号 寄=寄進状, 売=売券, 安=安堵状
 注=注文表, 添=添状, 写=花押なし
 ※花押の有無 有=花押あり, 印=黒印

※		※※									
No.	日付	文書形式	田島面積	田島在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田島所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
1	長禄 4.11.26	写	—	大門郷内井口横大路 屋敷空淨跡田島	—	松平弥次郎親則		岩堀横大路殿		下地年貢 4 貫 500 文・春 1 貫文・夏 1 貫文・秋 2 貫 500 文, 納所に沙汰申せ	
2	文明 17. 3. 22	寄	田 1 反	額田之内	—	松平大炊助正則	㊦	大樹寺			懇志あるに依て
3	長享 2. 9. 27		—	真如寺	—	長忠 (道閑) 西忠	㊦ ㊦	—			「出家の心中並身体失付候て大樹寺の計たるべし」「めいそう僧に渡付る」
4	長享 3. 1. 25	寄	田 1 町 屋敷	北鴨田之内のりかね 名	—	西忠	㊦	大樹寺			
5	延徳 2. 7. 22	寄	田 1 反	—	—	西忠	㊦	大樹寺			
6	明応 1	注		古井 越こまくら 福池 せいのおき 比目 こほりの下 あらゐ たしまおき いなふ 鏡松下 安城 柳そひ							「彼下地者月堂為月忌 靈供米永代寄進」 弘濟寺勘定注文 本引得分 22貫800文 古帳分 8貫250文 この内33貫223文支出 従って2貫173文不足で 大炊助方へ借錢とある
7	明応 2. 11	注	田25貫 8 反分 田 9 反 5 ツと7ツ 田22反 屋敷 8 所	小川 井付 なへ嶋丸岡十八分田 永福寺前 野辺 中のこし はしか 大木 あはう ほり口						本引得分 25貫 8 反 古帳出来の下地 8 貫 350 文 とあり No.6 の 収入合計と違っている	
8	明応 3. 10. 28	売	—	大樹寺西川端島之事	7 貫文	松平紀伊入道栄金	㊦	大樹寺	名田作 職移動 納所	毎年年貢300文を名主方へ	額田拾人百姓之内井口 之郷次郎右衛門名田之 内
9	明応 3. 10. 28	売	島 2 反	築井原, 東は寺の西 の林の下の嶋を堺, 南西ハ川を切, 北は	7 貫文	井口道性之次郎 右衛門	㊦	大樹寺	先祖相 伝之名 田	年貢300文を地主方へ沙汰, 諸役・公事あるべからず	

10	明応 6. 7. 25	寄	林	道を堺、この道の北に田少あり	——	(西忠)花押のみ	㊦	大樹寺	彼山は20箇年余西忠林也	西忠往生以後は大樹寺の計たるべし
11	文亀 1. 8.	寄	荒居地 3反 田 2 反	伊賀塚本 安城むかひ田・西尾	——	西忠	㊦	大樹寺	作識永代預り30年余 1石4斗之内8斗竹谷弥七郎方へ渡し6斗は西忠地利納の爲とし、この6斗を霊供米として寄進、田2反の6斗は毎年念仏の爲とし常在軒請取とす	
12	文亀 1. 12.	売	畠 1 反と 5 ツ	赤代にて東は的場を堺、南は寺の志ほりを堺、西は弥九郎の裏の法林庵かひつのかへに進置候畠を堺北は路を堺とす	5 貫文	孫九郎 弥九郎 弥二郎兵衛入道 道応	㊦	大樹寺	先祖普代の屋敷の内	
13	文亀 2. 9. 21	売	畠 1 反	鴨田赤代の内的場、お寺の東の松林の後で東北者道を堺、西南はみそを堺	2 貫文	弥九郎 孫九郎 道応	㊦	大樹寺	先祖よりの地の内	
14	永正 1. 1. 14	写	13俵1斗2反(2俵) 2俵 2俵 2俵 6斗 700文	入路・机田 伊賀 安城	——				町田分として門前者共納、月堂桂堂の月々の霊供米として門前者納め、西忠日供として伊賀の納め御馳の日供米として安城玄蕃の内から納められる、 御春預修の日供米として御内納め、白御寄進により池田大門西庄殿の弁とある、 鐘つき分として西忠寄進により鴨田道幸の弁とある	細川市升にて1俵3斗同 2俵は細川升で6斗

No.	日付	文書形式	田面積	田 畠 在 所	沽却値	差 出 人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	そ の 他 摘 要
14b		写	2反1石 4反2石 4反4斗 1おさ1斗 1反6斗 1反6斗 1反6斗 2反1石 2反2斗 3反1石 8斗 1反6斗 1反6斗 1反4斗 1反5斗 1反6斗		—			大樹寺		聖林寺弁 同 同 右衛二郎納 孫七納 大部四郎納 孫四郎納 二郎さへもん納 七郎衛門納 藤内衛門納 九郎大夫納 聖林寺納	棚尾分納升として10石5斗5升、これは常住の倍堂升で37俵1斗3升とある
14c		寄	40俵		—	大樹寺九代鎮蒼	㊦			道場分	14b の棚尾分の帳面は無用である、替に道場分40俵寄進するとある
15	永正 9.12.27	売	田1反	在所上田	4貫400文	鳥山三郎左衛門忠正	㊦			公方年貢は100文、諸公事なし	斗代は5斗目 No. 51 参照
16	永正10. 4.24	寄		平田おとり堂分	—	道閑	㊦	大樹寺			2貫500文を灯明銭并に定香銭として寄進、再度蔵人方より寄進状を出すとする
17	永正14.11. 3	写	田3反	宮崎	—	岩津弥八郎、弥太郎				所当2石2斗の内毎年600文を籠の菩提坊へ納所	19貫分3反寄進
18	永正14.11. 3	寄	田3反	ミやさき	—	岩津弥八郎、弥太郎	㊦			同上	同上
19	永正14.12.13	寄	田1反	安城の郷で高済寺東	—	牧内弥一郎光親	㊦	高済寺	名辺田四郎二	100文の公方年貢の外は諸公事はない	1反5斗目とある No. 110 参照

20	永正15. 5. 16	売	田1反	あかまつミそ東下か	3貫 500文	安城左馬守長家	㊦	郎の名 田	公方年貢を毎年100文納所	1反500文目とある No. 29 参照
21	永正15. 8. 9	寄	野一所	寺山と井田の林間	—	植松入道安忠	㊦	大樹寺		
22	永正16. 7. 12	売	800文	ささき如来寺の馬場	7貫文	善七郎、二郎四郎、しやうはん	㊦	いりは二 郎く郎	年40文をささき中務殿に納める	No. 121 参照 家次の花押あり
23	永正17. 3.	売	2斗	山田	2貫文	ひこ七、四郎五郎(鴨田)	㊦			異筆で「大樹寺へ寛 守詣奉寄進者也」との 追筆あり
24	永正18. 2. 21				—	板倉兵庫助安広	㊦	大樹寺守 詣		料足5貫文を田地2反 所当8斗を抵当として 借りている。内5升は 水損や干ばつの為に変 動することがあるとあ る
25	大永 1. 10. 6	売 寄	田1反 1斗の少 田	大門前大くは 為賀の山岸	3貫文	植村入道安忠	㊦	大樹寺		田1反所当3斗 不断念仏の時に智琮・ 光清童女2人の豊供米 として一週間の御十念 に預かるための寄進
26	大永 2. 4. 12	売		ひかし田	2貫 100文	使人、かもち孫 左衛門、同まこ 太郎	㊦	大炊助	100文の年貢あり	寺の祠堂に入る下地だ として寄進す
27	大永 2. 7. 13	寄	田1反	東田	—	都築大炊助忠正	㊦	大樹寺仏 閣		宗椿菩提の為寄進
28	大永 2. 12. 1	売		青木嶋あい	2貫 500文		㊦	井之口彦 左衛門	所当2斗5升を不断念仏の 石米として納めていた	
29	大永 4. 3. 12	寄			—	松平左馬助長家	㊦	高済寺	毎年100文の公方年貢を寄 進	上田弥一殿へ永代売っ た土地である、No. 20 参照

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
30	大永 6.11.22	売	田 2 反	中おき	10貫文	上条準人入道為	㊦	桜井平右衛門			2反1貫100文目とある, No. 93 参照
31	大永 8. 2. 3	安			—	充蓮社玉簪, 道関, 明珠光簪	㊦		開山勢簪上人の寄進の料田	真如寺に400文の年貢あり	代々の住持并旦那等の沽却停止
32	大永 8. 2. 3	安			—	道関, 祐泉	㊦	大樹寺	祠堂方永代買伝畠紀并年地		
33	大永 8. 8.21	寄	田 5 反	小南田名	—	道関	㊦	大樹寺常住		2石のうち7斗5升は真福寺へ年貢, 6斗は西都少納言に納む	
34	大永 8.10.吉	売	畠 2 枚		現錢 2貫 500文	鴨田助さへもん	㊦	大樹寺		公方年貢200文, 諸役はなし	追筆に「今は年貢なし」とある
35	大永 8.11.16	安			—	道関	㊦	大樹寺		泉松庵の諸役は守諦の一期のみ免除	
36	享祿 2. 2.16	売	2石1斗 8斗	ませくち伊賀はさま, とひのす, こふか田	直錢 25貫文	磯辺御鍋	印	大樹寺祠堂方	先祖相伝の私領	公方年貢として5月500文, 9月300文伊賀八幡の禰宜方へ納所公事は八幡領の為免除	ませくちは2石1斗伊賀は8斗, 合せて2石9斗の売渡, 升は庄升とある
37	享祿 2.10.吉	寄	田 5 反	佐々木如来寺領内	—	道関	㊦	三木殿			三木春林寺に10俵分寄進, 礼として道関は300疋請取る
38	享祿 2.10.吉	売	畠 1 所	門前	2貫 250文	助さへもん	㊦			公方年貢は夏100文, 秋150文	追筆に「今へ年貢なし」とある

39	享禄 4. 2. 吉			——	かみわた七郎衛門	㊦	大樹寺		無沙汰なく納められるよう要望, 但し水損のある地なので考慮して欲しいとある
40	享禄 4. 10. 24	寄 田 3 反	伊田前	——	松平岡三郎	㊦	宗樹軒	公方年貢は1貫文で400文3度で納む	
41	享禄 4. 12. 15	売 1石3斗2升	むめ平	12貫文	売主井田与十郎 信広 井田三郎左衛門忠正 同五郎左衛門頼久 酒井藤七郎忠勝	㊦	大樹寺祠堂方	公方年貢は真福寺に200文納所	たとえ水損干ばつなれども1升でも無沙汰したら作人からとりあげてよい
42	享禄 4. 12. 23	売 田 1 反	はやかわ	3貫300文	売主井田五郎さへもん頼久 同八郎二郎頼次	㊦		公方年貢は200文大もつ東座主殿へ納める	所当4斗5升 端裏書に「念仏衆中永代状」
43	享禄 5. 3. 5			——	いた与十郎	㊦	大樹寺		安堵状を認める書状で 違乱あれば居屋敷を5 つ出すとある
44	享禄 5. 8. 6	寄 田 2 反	安城	——	松平彦四郎利長	㊦	大樹寺		浄円はいの堂の志として 寄進, 所当は1石
44b	8. 6			——	松平彦四郎利長	㊦	大樹寺		44の添状か? 6斗は当秋売り渡し, 4斗は甚九郎向け志にするので 年記が明けるまで待って欲しいとある, 4斗分は高済寺に差出すものである
45	享禄 5. 12. 3	売	寺之下	1貫文	井ノ口彦左衛門	㊦	大樹寺	年貢300文を売渡	「岡崎殿新徳政」とある

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
46	天文 2. 2. 14				—	上田源助元成 上田宗太郎清房	⑥	天蓮社秀 登上人	清金名 田		嶋田平三より買得した 際肩代りしてもらった 100貫文に対する相当 分として清金名田を進 上するところ
46b	天文 2. 2. 14		田1反 田1反 田1反 田1反 田1反 田1反 田1反 屋敷 山畠1枚 1斗5升 1斗5升 田5反 田1反 田1反	町田 つか原 なはて崎 あはら田 こいなはの下 同堀口 同 こいなはの下 ほりくち 五反田 一つか よこ枕	—	上田源助 上田宗太郎清房	⑥	天蓮社上 人		清金名坪付 所当 5斗 5斗 5斗 4斗 4斗 4斗 4斗5升 5斗5升 600文 5斗目 5斗目 5斗目 裏書に「秀白譲置候」 とあり秀登の署名あり	
47	天文 2. 2. 29	売	田2反 田3反	大門前三作 薮田南山道	6貫 700文	真福寺桂林坊栄 正 井口右馬允親家	⑥	大樹寺		年貢700文 年貢800文)について売却	所当1石4斗 所当1石 「作法は大門元忠引得」
47b	天文 2. 2. 29	同文 写			—						
48.	天文 2. 12. 吉	売	5斗5升	はずの田	直銭 4貫 700文	売主ほそい新五 郎 同重三郎 使 ひこゑもん	⑥	大樹寺祠 堂方	大門こ らゐら さん へもの 議渡		

49	天文 3.11.27	売	田 1 反 畠 1 反	ひなまへ、たかくろ	8 貫 500文	中根弥五郎重次	㊦		公方年貢田畠100文づつ売 主へ納所	所当 田 5 斗 5 升 畠 700 文、No.106参照、No. 106 の本券
50	天文 3.12.19	売	8 斗 5 升	岩本みそそ井	直銭 8 貫 500文	売主片原三郎さ へもん 同子孫五郎 口入河内主計	㊦	大樹寺祠 堂方	先祖相 伝の私 領	升は常住の升
51	天文 4. 1. 吉	売	田 1 反	上田	4 貫 2 百文	賀藤主計忠久	㊦	大樹寺玉 簀	鳥山氏 より買 った下 地	No. 15参照、地代の低 下、所当 5 斗
51b	天文 4. 1. 吉 写	同文			—					
52	天文 4.10. 1		9 斗	池内きろ	6 貫 500文	井口彦左衛門 同 弥七郎	㊦	大樹寺念 仏講	公方年貢 2 斗 5 升を換算し て500文地頭方へ納所	5 斗が 1 貫文に換算
53	天文 5.10	寄		如来寺領	—	道閑	㊦	大樹寺侍 者		100貫文の借錢のかわ りに造営分として寄進
54	天文 5.11.27	売	畠	せき橋	3 貫 800文	井口太郎左衛門 藤一郎、松	㊦	大樹寺資 堂善玉	公方年貢200文納所	所当 5 斗
55	天文 5.12.23	売	4 斗	たけはな	3 貫 400文	やふた八郎二郎	㊦	大樹寺念 仏講	この内 6 升は年貢100文と して真福寺金蔵坊へ納所	
56	天文 6. 9.17	寄	3 斗	やふ田南山道	—	無多、与三郎	㊦	大樹寺		浄忠、昇林、非多の 3 人の菩提の為に寺升で 3 斗目の田寄進
57	天文 7. 3.18		2 石 9 斗 畠 2 枚 畠 1 枚 5 斗	門前 門前	25 貫文 2 貫 500文 2 貫 250文 4 貫 200文	玉簀	㊦	大樹寺	年貢100文納	大樹寺祠堂分田地 売主磯辺ノ御鍋 鴨田助き衛門 鴨田助き衛門 井田ノ三郎き衛門

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
58	天文 7.10.28	寄	田 1 反 4 斗 5 升 8 斗 5 升 8 斗 5 升 田 畠か?	大津堂の後	——	玉簪 寄進施主山岡半 左衛門忠兼	㊦	大樹寺	半一郎 買得相 伝の地	年貢200文納 三作年貢 1 貫500文の売渡 年貢300文の売渡	嶋田ノ新五郎 杉原三郎さ衛門 鶴田彦一郎 真福寺桂林房 井口彦さ衛門 祠堂錢 1 貫文を鶴田年貢買得 5 貫文を三具足一莊、 2 貫文を馬代として、 他に20貫文払っている
59	天文 8.12.31	売	田 2 反	滝領井田まへいはら みそ	3 貫 900文	井口彦左衛門 取次宗蔵	㊦	大樹寺泉 上人	代々相 伝の地	本年貢 800 文滝善提坊へ納 める、他役なし、加増子 9 斗	
60	天文 9. 1.19	売	田 3 反	上田	11貫 700文	井関宗衛門尉玉 泉 同与次信正	㊦	大樹寺泉 簪		公方年貢 300 文真福寺年行 事方へ納所、諸役なし	所当 1 石 3 斗 5 升 升は所当升
61	天文 9. 4.11	売	畠	せきの橋	3 貫 200文	井口藤一郎	㊦	大樹寺資 堂		公方年貢 300 文を井口藤一 郎が滝山ともに毎年行く 時に納める	所当米 5 斗
62	天文 9.10. 2	売		井之口せき川	3 貫文	売主門前孫さへ もん	㊦	大樹寺祠 堂		本年貢は天神へ 200文、足 立宗四郎へ 100文 納める、 他役なし	
63	天文11. 6	寄	町田 2 反 敷		——	松平藏人佐信孝	㊦	大樹寺			町田 2 反 1 石并敷 2 斗 5 升合せて 5 俵寄進

64	天文11. 9. 20	寄	田2反	下仁木のふるかわ分 はなけ	—	しんそう 御使ちん一郎	印	たいよ			
65	天文12. 2. 15	寄	田2ヶ所	大坪 井田前堤そへ	—	会哲信譽	㊦	大樹寺	井田成 瀬次郎 兵衛より 買得地	本年貢 200文 真福寺へ大樹 寺常住分と 信譽から 100文 づつ納所	所当は大坪が8斗目、 井田前が4斗5升目、 月牌米として寄進、 No. 95 参照
66	天文12. 3. 7	寄			—	岡崎三郎広忠	㊦	大樹寺宝 誉上人			寺内に寮舎屋敷がない ので焼香分并土器屋敷 寄進
67	天文12. 10. 19	寄	田2反	大平郷	—	松平小法師	㊦	大樹寺侍 者	松平小 法師知 行の地		所当 1石2斗 道見・道嘉の菩提の為 寄進
67b	天文12. 10. 19	寄	1石2斗		—	堀平右衛門入道 清道 高橋一左衛門入 道良道	㊦	大樹寺侍 者	兩名の 名田		
68	天文12. 11. 1	寄	田畠	鎌田前茶木嶋 大門馬場西面	—	板倉助五郎康正 使 大原新四郎	㊦	大樹寺第 八代之住 持等蓮社 宝譽	先祖相 伝の領		木嶋が800文、馬場西 面が400文、目 法名清幸なる人の月牌 菩提の為に寄進
69	天文12. 11. 29	寄			—	当住八代宝譽 大工藤原氏朝臣 内河与三兵衛長 康	㊦				馨一口(唐口1尺2寸 余)と台を宝譽寄進
70	天文13. 2. 26				—	宝譽	㊦			屋銭は1坪に3文宛	大檀那岡崎次良三良の 寄進により南方へ拡張 されたが、地子免除は していないと一筆書い たものである
71	天文13. 12. 吉				—	祖洞	㊦				祠堂銭を30貫 200文宝 譽より請取り常住の用 などに使っている

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
72	天文14. 2. 19				—	内藤橋兵衛尉	㊦	大樹寺		古井法泉寺に年貢は2貫文納所	
73	天文15. 2. 10	寄	1石1斗5升 9斗5升 3斗 5斗	はり口 こいなは つかはら みそ口	—	天蓮社秀養 宗太郎清房 上田七郎兵衛尉 元成	㊦		祠堂錢により秀養買得の地		合わせて12俵とある
74	天文15. 2. 10	寄	4斗 4斗5升 5斗 5斗 5斗	あはら田 町田一塚 五反 石橋	—	天蓮社秀養 宗太郎清房 上田七郎兵衛尉 元成	㊦		祠堂錢により秀養買得の地	年貢 400文 200文 200文 200文 と作職 6斗目 2反寄進	合わせて16俵とある 所当5斗目は長合庵長清寺の寄進 No. 73, 74 共に上田一族の位牌所としてある 光秀院と蓮乗院に倍堂米として寄進, 端裏書に「秀白讓置候」とある
75	天文16. 2. 1	売	田1反	井田茶之木嶋	2貫 750文	酒井九郎兵衛尉 康家	㊦	大樹寺納所		真福寺へ毎年100文納所	所当6斗
76	天文16. 2. 26	売	2石5斗 5升	阿知和宮崎	21貫文	中山大井野橋平 信正	㊦	大樹寺		公方年貢も共に売渡 地頭は滝善提坊	細川市升で2石5斗5升, いち升では3石とある。No. 17・18参照
76b	天文16. 2. 26	同上 写			—						
77	天文16. 4. 21	売	田2反	大門前くろさき	祠堂錢 7貫 300文	内田五郎衛門信 家 内田与一郎信次	㊦	宝樹院		公方年貢は滝善提坊へ20文納所	細川升で1石
78	天文16. 7. 25	寄	家屋敷		—	為親	㊦	大樹寺長老衣鉢閣下	為親買得の地		

79	天文16. 12. 5	寄	30貫目分	真如寺領内	——	岡崎三郎広忠	㊦	大樹寺	公方年貢は大門築田方へ2貫550文納所	作人は誰の被官であろうと寺の計らいによる父の13回忌の為寄進
80	天文17. 2. 5	寄		いなくま地	——	清春 酒井九郎兵衛康家	㊦	大樹寺人々	公方年貢100文納所	井田升で5斗5升
81	天文17. 12. 7		田2反	太子地	——	上田七郎兵衛元成	㊦	大樹寺納所		田2反の大樹寺の買得には異議なしとある
82	天文17. 12. 11	売	田2反	鴨田之内太子地	現銭 7貫文	井口宗訓	㊦	大樹寺鎮營上人		もと西忠寄進の地だが越後殿の押領にあう、散田升で1石1斗5升
83	天文19. 2. 2	売	6斗	茶木嶋	3貫 250文	井田九郎兵衛	㊦	大樹寺	本年貢は10疋真福寺へ納所	
84	天文19. 2. 5	寄	10俵	如来寺領	——	あかはね 鎮營	㊦	大樹寺		10俵成の田をのちのち寄進するとある
85	天文19. 6. 13	安			——	治部大輔	㊦	大樹寺方丈	寺領は祈願寺とし守護使不入の地である	参河国額田郡鴨田郷大樹寺とある、松平家ではなく今川家に安堵してもらっている
85b	11. 29				——	備中守泰能 雪斎	㊦	魯耕鎮營上人御房	勅願所であるから不入の地である、本末田畠直務祠堂以下旧規の如し	
86	天文19. 10. 10				——	治部大輔	㊦			寺領の安堵のための禁制
87	天文19. 10. 10	安			——	治部大輔	㊦	大樹寺方丈	旧規の如く寺領祠堂以下相違なし	代官百姓等年貢払わないものは召放たれる
88	天文20. 6. 21	安			——	治部大輔	㊦			中山郷田口村庵室屋敷并弟子受幹に譲置し田地、大樹寺塔頭并充蓮社の塔頭、いづれもの

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
89	天文20. 11. 2	注	田11所 畠方 畠2反 田方	石原・石河・堀・小河・姫等、 十王堂・なわき・机はた・御堂前・文八前・文八西門屋敷・はしか・鍋島 かけはた・おりとをき・十王堂・法泉寺・耳取堂はさま・こうかせ・丁田高濟寺後・永福寺前・中ねこし・塚下・橋之上・古城下・せいをき・寺下・松本	——	鎮蒼	㊦				安堵、又買得の田畠を前の主人や地頭が散田せしめても相違あるべからず 高濟寺分 17貫550文 7貫600文 1石2斗 34貫350文 高濟寺看察分 4石2斗升は古井おさめ
90	天文20. 11. 15		田2町	安城内陰田(知永寺領)	——	鎮蒼 堀入通道清	㊦	大樹寺	道関よりの給田	1石2斗の年貢あり	升は12合升
91	天文21. 6. 10	寄	田3反	青木・西之田面	——	松平三郎右衛門 入道浄賢	㊦	大樹寺鎮 蒼上人		年貢1貫300文納所	1石9斗分の寄進 母の霊供米とする
92	天文22. 11. 2	安			——	治部大輔	㊦	鎮蒼上人			諸法度を守るべし 塔頭以下相論并に田墾等についての申し事があれば門徒僧侶を集めて裁許するように 寺領祠堂等は本寺末寺共不入であること 以上の3点の判状。

93	天文24.12.13	添			——	道清	㊦	念仏年行事	公方年貢100文監物方へ納める	
94	天文24.12.13	寄	1石8斗5升	蔵前・井田西	——	堀入道道清	㊦	納所	公方年貢600文納所	
95	弘治2.1.11	寄	8斗5升	岩津蔵前	——	堀入道道清 堀平右衛門入道 宗政	㊦	中興開山 呈蓮社鎮 蒼淨土院法 蒼長福寺隣 蒼朝樹軒漢 蒼開花院訓 蒼宝樹院進 蒼舟軒円 蒼	公方年貢300文滝之菩提坊へ納む 公方年貢300文成瀬与十郎へ納む	
			1石	井田之西				道関より給 道関より給 道関より給		道関菩提の為寄進
			1石	五箇井戸尻						
			5斗	古井宮之西						
			5斗5升	古井芝崎						
			1石1斗	上条中尾					公方年貢100文松平監物丞方へ納	上条女清金菩提の為寄進 上記はいづれも別時念仏に寄進したものである
96	弘治3.4.18	寄		山内寺地	——	助蔵	㊦	大導寺		新地取立につき山内寺地を寄進
97	弘治3.12.9	売	下地3反 田1反		——	三宅太郎左衛門 忠秀	㊦	昇蓮社進 蒼		永代沽却した田の内水口1反を買い戻したがその証文を紛失した。その田を沽却するが本券をもって証文の代わりとして欲しいとある No. 100 参照
98	弘治3.12.9	売	発田	こしさか寺山のはし	1貫文	三宅孫五郎伊忠	㊦	昇蓮社進 蒼	年貢400文の売渡か	
99	弘治4.1.吉				——	松平弾正 使 六郎左衛門	㊦	大樹寺祠 堂方		2石5斗8升の借用の担保として5斗5升の下地を提出している

No.	日付	文書形式	田畠面積	田畠在所	沽却値	差出人	花有押 の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	その他摘要
100	永禄 1. 10. 13	売	発田	寺前屋敷	2 貫 150文	加納太郎左衛門尉忠秀	㊦	進誉上人		年貢650文の売渡か	No. 97 参照
101	永禄 2. 8. 8	寄		阿知和宮崎	—	滝善提坊慶口	㊦	宝秀院		本年貢 1 貫 700文のうち 1 貫 200文を寄進、残り 50 疋は年貢として滝善提坊へ納所	近藤橋平方の沽却した田地の一部を浄賢祠堂と妙孝の逆進の為寄進
102	永禄 3. 1. 11	寄	6 斗	牧内南裏	—	中山弥八郎忠次	㊦	大樹寺			道香禪定門の菩提の為に殊に大樹寺梅月庵の仏供田として寄進 No. 118 参照
103	永禄 3. 12. 29				—	松平又二郎貞広	㊦	光忠寺進 誉上人		年紀米を 2 年に分けて 3 俵 づつ納める	
104	永禄 3. 12. 29	売	下地 2 反	西浦西口口	祠堂銭 7 貫文	松平又二郎貞広	㊦	光忠寺進 誉上人		本年貢共に沽却	花月正栄の菩提の為と長誉上人の為に売渡 所当は 1 石 2 斗
105	永禄 4. 2. 2	売		木林下, 大院	祠堂銭 1 貫 500文	三孫五伊忠	㊦	愚耕寺		年貢500文の売渡	
106	永禄 4. 3. 19	寄	田畠 1 反	日名前	—	京順	㊦	大樹寺祠 堂		公方年貢100文を中根弥五郎方へ納所	所当は大升で 5 斗 5 升 祠堂升では 6 斗 合せて所当 6 斗 700 文 の寄進, No. 49 参照
107	永禄 5. 12. 25	売	下地 1 反	貝場寄本前	祠堂米 18俵	藤二郎 亮主 忠助	㊦	進誉			所当 7 斗 2 升目売渡 升は平田升
108	永禄 6. 12.	安			—	松平藏人家康	㊦	大樹寺進 誉上人			諸法度・勤行は先の如く住持の命に従う 寺領, 祠堂諸所田畠, 特に古井と佐々木の 地, 寺中井門前屋敷は 鎮誉上人の代の如くに 仰せ付ける

								以上の判形がでている
109	永禄 7. 2. 5	写	6斗	山の田	祠堂銭 2貫文	孫三郎	進誉上人	
110	永禄 8. 2. 15	寄		安城の馬道門・薮崎 清之前	—	名部田新左衛門	⑨ 大樹寺	阿弥陀の仏供田に2斗 釈迦の仏供田に2斗 二季の彼岸月忌分に宗 作に2斗寄進 No. 19 参照
111	永禄 8. 5. 23				—	松主馬丞信秀 口入番匠宗六・ 五郎左衛門	⑨ 大樹寺納 所	祠堂銭1貫文の借用の 担保として井下の所当 3斗目の土地を提出し ている
112	永禄 8. 12. 13	添		神庭寄本前	—	加納孫五伊藤 検狭藤六	⑨	公方成として1斗卯月まつ りの時に納所
113	永禄 9. 2. 7				—	利久	⑨ 進誉上人 侍者	
114	永禄 9. 4. 18		田4反 畠	遍照院前 井之上・かみはしか	—	法藏院東与	⑨ 大樹寺進 誉上人	梅月庵の庵主の契約は 2貫300文でなされて いる
114 b	永禄 9. 5. 19	写		ちかしり・座頭池・ 井之上・一色・古井 分河嶋鍋嶋	—			所当は田が1石6斗目 畠が1貫700文目で永 代譲与している
115	永禄 9. 5. 19			こんは	—	豊田基次郎 太郎左衛門 彦右衛門	⑨ 大樹寺納 所	秋に2回にわたって2貫 500文を納所
116	永禄 9. 5. 25			やかい・ほん京と・ うしは出口・すか・ つきなわて 小川分かけ下・大か いと・よこまくら・ のいけ	—	石目	⑨ 大樹寺	「つほ付」 10貫目の取入

No.	日付	文書形式	田畠面積	田 畠 在 所	沽却値	差 出 人	花有押無の	宛所	田畠所職	年貢・公事・得分関係記事	そ の 他 摘 要
117	永禄 9. 5. 吉		田 6 反 畠・屋敷	宮の下・山之田・犬 ころし	—	通俊	㊦	大樹寺進 營			大樹寺の末寺になるにあたっての勘定注文書及び礼としての1反寄附 所当 1石7斗1貫500文
118	永禄10. 2. 3 寄			牧内南うら	—	中山弥八郎忠次	㊦	大樹寺進 營上人			道香禪定門の菩提の為 梅月庵に寄進、梅月庵 主利久との契約異議なし No. 102, No. 113 参照
119	永禄11. 12. 13			こはり下	—	内蔵利長	㊦	進營上人			啓善が紙墨の便として 8斗目の下地を出置く 長瀬石米升による
120	永禄12. 6. 25				—	徳川参河守家康	㊦	大樹寺登 營上人		寺領は不入の地である 寺中門前は諸役一切なし	家康の制状
121	永禄13. 11. 11 寄	畠		佐崎如来寺ばんば崎	—	中嶋二郎兵衛尉 信次	㊦	大樹寺登 營上人	買得の 地		父浄慶禪門の菩提のため 800文目の畠を寄進 No. 22 参照
122	元亀 2. 5. 5 寄		3石8斗	遍照院下地 ちかしり・さとうい けえ上・一色・井之 上・河嶋・古井・石 原	—	古井文宗	㊦	大樹寺御 老僧			遍照院下地を当年より 大樹寺に寄進 No. 114b 参照
123	元亀 2. 12. 16			井下の畠	—	明大寺信秀	㊦	西谷納所			井下の畠は返して欲しいが 3斗目の田は知行してよい、 No. 111 参照
124	天正 2. 12. 2 寄				—	上田七郎兵衛尉 清房	㊦	進營上人			「光秀院之儀、月庭浄 光依有御焼香塔頭并寺 領十式儀成」を寄進 ついでに進營の弟子の 中から光秀院住持を出

125	天正 2. 12. 26	借		針下	——	板倉伝十郎家貞	㊦				して欲しい。 No. 73・74 参照
126	天正 7. 3. 28	安				家康	㊦	大樹寺 勢連社 磨 菅上人	諸役課役免除		祠堂錢 1 貫 500 文の借 用の担保に 8 斗目の田 をおく
127	天正 9. 10. 6	注		いけ内・上の田・下 の田・からすミとう ・さほたり・はね取 い・松本・はな野・ チふく・はたミち・ おんたて	——	長坂市兵 岩津助平 筆 鶴成	㊦				祠堂錢借用にあたり、 米錢三和利二文子に定 めている
128	天正16. 11. 6	寄	田 2 反	大林寺うら	——	吉田清十郎 内佐太 内佐五助 羽半三郎	㊦	大樹寺あ したた			注文表である 13石 6 斗 3 升のうち 11 石 3 斗 5 升取得
											清秋の菩提の為に寄進

